

(始良郡牧園町万善)

位置と環境

本遺跡は、牧園町の北西部、横川町と境を接する大字万善の中園地区にあり、天降川の支流である万膳川左岸の河岸段丘に位置する。一帯は狭小な水田地帯で、遺跡の標高は約180mを計る。

万膳地区は、建久8年(1197)の大隅国図田帳に「万膳十二丁」の記載があることから、中園遺跡付近は早くから拓けていたと思われる。

調査の経緯

「県営ほ場整備事業(万膳地区)」の計画にあたり、平成元年に実施した埋蔵文化財分布調査結果を受けて、平成2年に牧園町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て確認調査を実施した。

調査対象区域内に15本のトレンチを設定し、確認調査を実施した結果、縄文時代、古墳時代等の遺物と柱穴が確認された。

また、遺跡は設計変更により保存されることとなったが、一部については削平を受けることから本調査を実施した。

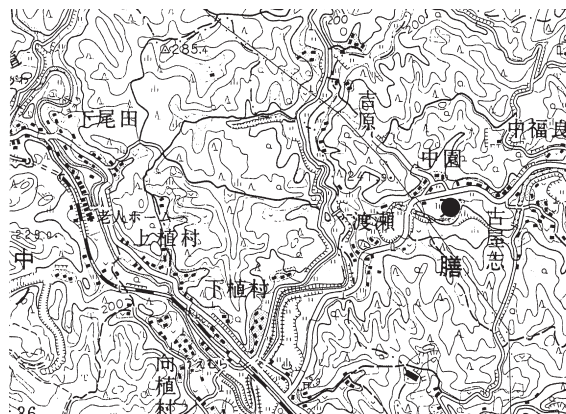
遺構と遺物

遺構は、古墳時代の地下式横穴墓2基、近世の掘建柱建物跡2棟、堅穴遺構2基が検出された。

地下式横穴墓2基は、いずれも床面までほぼ30cm程度を残すだけで、規模は小さく、長楕円形の長辺側に堅壙にあたる円形の掘り方が付く平入りタイプである。

1号地下式横穴墓は、南北に主軸を持ち、堅壙から玄室までの長さは180cm、玄室は長辺165cmと短辺110cm、堅壙は直径約70cmの円形を呈す。堅壙の床面は玄室の床面より若干深く掘られ、副葬品として鉄鏃が玄室の東北隅から4本、埋土中から4本計8本が出土した。

2号地下式横穴墓は、主軸がほぼ南北をむき、堅壙から玄室までは206cmを測る。玄室の規模は、長辺214cm、短辺110cmである。堅壙は、直径80~90cmのほぼ円形のプランを呈し、床面は玄室より若干深く造られている。



第1図 中園遺跡の位置

1号掘立柱建物跡は、古墳時代包含層を削平し、2間×4間の建物規模で主軸はほぼ北東にむく。各柱穴は、直径約80cmと大きく、深さも60cm前後を測る。

2号掘立柱建物跡は、主軸が1号掘立柱建物跡と同じようにほぼ北東をむき、2間×4間の建物規模である。各柱穴間の距離が不揃いではあるが、各柱穴の規模は揃っている。

1号堅穴遺構は1辺250cmの正方形を呈す。北東側辺が2号堅穴遺構と重なり、2号堅穴遺構の下部から検出された。検出面から床面までの深さは約30~40cmである。内部には側壁に沿って柱痕跡と考えられる。

2号堅穴遺構は、長辺が270cmと短辺223cmの長方形を呈す。床面の深さは10~20cm程度と浅い。柱痕跡は1号堅穴遺構と同じく堅穴側壁に沿い、径及び深さ、形状とも同じである。

縄文時代の遺物は、二本平行の凹線文を施す後期の指宿式土器と晩期の刻目突帯文土器が出土しているが、いずれも量は多くない。

古墳時代の遺物は、成川式土器と石器が出土している。出土した成川式土器には、甕、壺、高坏、埴の器種がある。甕は口縁部が外反し、突帯を有するものと有しないものがある。脚部の作りが特徴的で、短い脚はラップ状に開き、僅かに上げ底か平底である。壺は、胴部や肩部や頸部に突帯を巡らさない簡素なタイプがほとんどである。

高坏は部分的な破片が多く、全容はつかめないが、脚部に特徴がある。脚の裾部だけ開くものと、全体

的に開くものがある。

埴は、頸部より口縁部へ直線的に外向し、口縁径は胴部径より若干広い特徴をもつものが多い。

1号地下式横穴墓から出土した8本の内、5本主頭形で刃部の断面は両丸造りから平造りで、残りの3本は柳葉形で断面は両丸造りであった。

歴史時代の遺物としては、須恵器、土師器、土製形代、青白磁がある。

須恵器の埴の底部が1点出土した以外は、全て胴部片であった。土師器には、坏・甕・皿がある。墨書土器も2点出土しているが、判読はできない。

特徴

遺跡内の高台に包含層が形成され、墳墓が河川沿

いの低地に構築されていることは注目される。また、本遺跡検出の地下式横穴墓は、縦穴が南側で玄室へは平入りに付くタイプで、大口市瀬ノ上地下式横穴墓と規模がほぼ同じである。なお、地下式横穴墓の分布は栗野町や吉松町が西限にあたるが、僅かではあるが、川内川から内陸部に入った地域において確認されたことも特徴的な成果である。

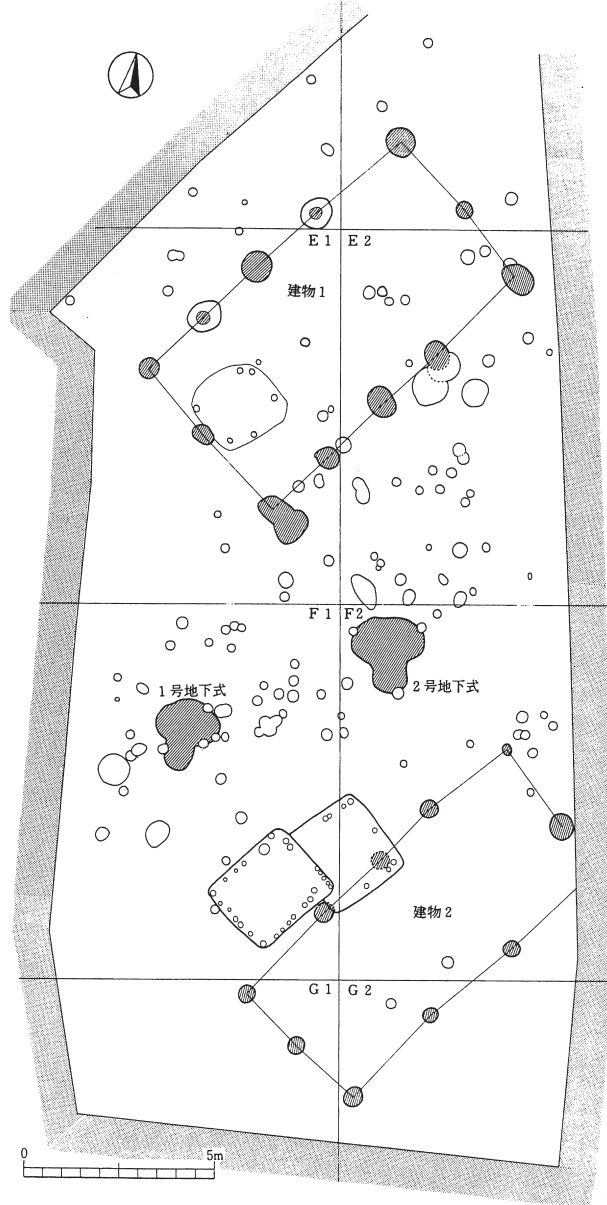
資料の所在

出土遺物は、牧園町教育委員会に保管されている。

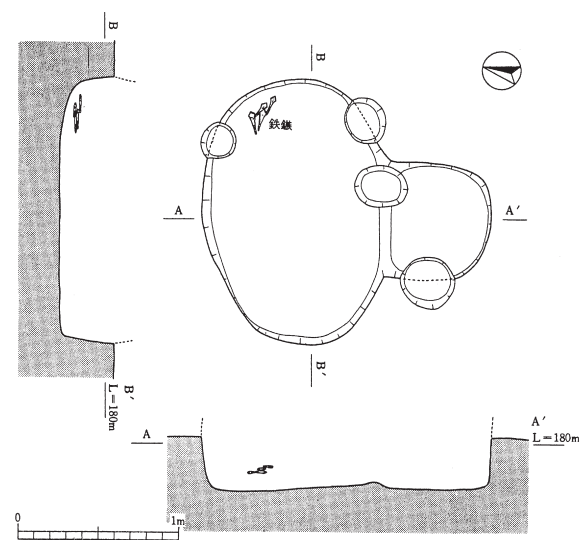
参考文献

牧園町教育委員会1991「中園遺跡」『牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書』（2）

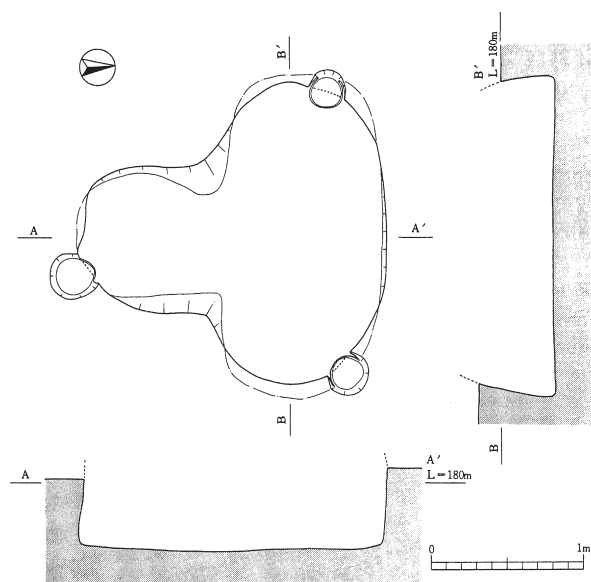
(倉元良文)



第2図 拡張区の遺構配置図



第3図 1号地下式横穴墓実測図



第4図 2号地下式横穴墓実測図